

Title	<書評>『美術教育の歴史と哲学』 スチュアート・マクドナルド著 中山修一・織田芳人訳 玉川大学出版部 1990年
Author(s)	日野, 永一
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 140-142
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53211
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『美術教育の歴史と哲学』

スチュアート・マクドナルド著
中山修一・織田芳人訳
玉川大学出版部 1990年

情報手段の発達した現在では、デザイン教育の世界でも共通な方法論に立脚している、国の違いによる差異はあっても、それほど大きな違和感を持たずに済むことができる。しかし百数十年前に始まった西欧諸国の近代学校教育制度の黎明期においては、各国それぞれの事情によって、様々な方法が採られていた。また美術教育においては、その多くは産業育成、つまり今日のデザイン教育の目的をもってスタートしたという共通性を持ちながらも、それぞれの国の特殊事情によって発展経緯が異なっている。例えば同じ美術教育であっても、現在では普通教育と専門教育とでは目的が異なり、まったく無関係な存在として受け止められがちであるが、ドイツや、また本書に取り上げられているイギリスでは、共通な根を所有していたことなど、日本ではそれぞれが別の路線としてスタートしたこともあって、理解しにくいことが多かった。しかもデザイン史の研究の中でも、人物や作品と比較して、教育の紹介は断片的にしか行われていない嫌いがある。これほど情報が氾濫した今日でも、日本に紹介された研究は少なく、謎のまま残された部分が多い。

本書は19世紀初頭から1970年までの、デザイン師範学校が中央美術訓練学校を経て王立美術カレッジとなるまでの展開を軸として書かれた、イギリスのデザイン教育の流れについての研究書で、上に述べた疑問

を埋める格好の著の一つである。全体は20章、約600頁に近い大著であるが、内容の構成を感想を交えながら、ごく簡単に紹介しよう。

まず最初の1・2章では、近代学校教育以前の美術教育の歴史、つまりアカデミーの歴史やその教育原理について述べられ、言わば導入部の役割を果たす。3章では19世紀初頭のイギリスで、デザインの優れたフランス製品の輸入によって、デザイン教育が国会で問題となる経緯が述べられ、続く4章ではこれによって1837年に設立されたサマセットハウス・デザイン師範学校や各地に設立されたデザイン学校の初期の指導・運営等について述べられる。この章に充てられた紙面は多い。5章では初期の指導者たちの指導理念が取り上げられている。これらの学校が、職工を対象とした職業教育としてのデザイン教育を目標としながらも、裕福な市民階級の子弟の美術学校となる実状については、教育方法に問題があったのか、社会情勢のなせる業なのかは、論議のあるところであろう。

6章から12章までは、1849年に下院特別委員会を、また52年には実用美術局を設置させ、73年に審議官を辞任するまで、この学校の教育を牛耳ったヘンリー・コウルが主人公である。コウルは1851年の万国博を成功に導いた陰の功労者としても知られるが、他書にも紹介されている活躍ぶりと併

せると、彼の超人的な働きが理解できよう。

ただ彼の意識が、職業訓練としての美術教育から一般教育に向けられたこと、またサウス・ケンジントン・グループの中から生まれたデザインの方法論、例えばオウイン・ジョウンズの『装飾の文法』やドレッサーなどの記述は、特に後者は日本に与えた影響もあることから、興味を持つ者に取ってはやや物足りない感が残る。

しかし13章に述べられた、アメリカに与えたコウルの影響については、紹介されることが少なからず興味深い。このような研究が出来るのも、同じ言語文化圏の強みだからであろうか。

14・15章ではサウス・ケンジントン校の純粹美術への揺り返し、スレイドの基金によって設立された美術学校について触れる。ラスキンがオックスフォードの教授になったのもこれがためである。16章ではイギリスの美術教育家たちが影響を受けたフランスのアトリエ教育が描かれている。

17章では、世紀末から今世紀初頭の、アート・アンド・クラフト運動を背景に、王立美術カレッジの学長として影響力を發揮したウォルター・クレインの時代で、工芸教育やデザイン科の設置によって、応用美術からデザインへの転換が行われた状況が述べられる。

最後の数章では、スロイドシステム、ウィーンの子ゼック、ポストンのダウなど普通教育の動向、20世紀の学校教育制度の中で王立美術カレッジがポリテクニックではなくユニヴァーシティとなる経緯（日本とは学校制度が異なるので、対岸の火事の感が無くもない）、そして基礎デザイン教育の問題や、日本ではまだあまり問題視さ

れていないが、視覚教育などについて触れている。ただこのあたりは、様々な現代的問題に触れざるを得ないという著者の問題意識があるのだろうが、歴史的記述という点からは、前の部分に比較してやや散漫な感を与えられる。

著者はこれらの問題を、デザイン教育を中心としながらも、美術教育という広い枠の中で捉えようとしている。したがって読者の興味・関心のありかたによっては、得るところも、あるいは物足りないところも出てくるのではないか。それは本書が一般的な通史というよりも、研究書という性格が強いためであるからかもしれない。ただ、いずれにせよ本書は、今後のデザイン史研究にとって、基本的な文献の一つとなるであろう。さらにベヴスナーの『美術アカデミーの歴史』や『美術・建築・デザインの歴史』などと併せて読むことによって、立体的に歴史を把握できることも出来よう。

最後に翻訳について触れたい。

このような大部の図書が、本学会の二人の会員の努力によって、身近に読むことが出来るようになったことに感謝したい。後書きに、可能な限り正確で読みやすい訳文を心掛けたと述べられているように、未熟な翻訳書に見られるような言語明瞭意味不明瞭といった箇所もない。ただ、その努力を十分承知の上で、2、3の希望を述べたい。

本書はイギリス人を対象に書かれたものであろうから仕方がないが、例えば当時イギリスの学校教育制度など、背景が分からないと十分な理解が得られない部分がある。訳注などで説明が欲しかった。また原文に忠実なためであろうが、例えば、鋳造品な

どは石膏像といった方が日本では通用しやすいのではあるまいか。さらにこの本の翻訳者の責任ではないが、人名の発音表記が著書によって異なるので戸惑うことがある。やがていずれかの読み方に定着するものはあろうか。

(日野永一 兵庫教育大学)